

令和3年度 全国高等学校総合体育大会（北信越総体） 大会総評

報告者：高体連技術委員 南稜高校 横山晃一

8月13日から22日にかけてテクノポート福井総合公園スタジアムなど福井県内各地で開催された全国高等学校総合体育大会に、本県からは正智深谷高校が出場した。決勝戦は青森山田高校（青森県）対米子北高校（鳥取県）の顔合わせとなった。延長までもつれ込む接戦の末に試合終了間際の劇的なゴールによって2-1で米子北を振り切った青森山田が2005年以来となる2度目の優勝を果たした。正智深谷は14日の初戦で神村学園高校（鹿児島県）と対戦した。結果は0-3で初戦敗退となり、ベスト4入りを果たした2013年の成績を上回ることが出来なかった。

以下にまず正智深谷の対神村学園戦の試合分析をまとめ、次に今大会全般の振り返りを記載する。

1 正智深谷0【前半0-1、後半0-2】3神村学園

大会期間前からの雨が降り続き、時折雨足が強まったが、良質な天然芝のおかげで両チームともボール扱いに苦慮する様子は感じられなかった。正智深谷は1-4-2-3-1、神村学園は1-4-1-4-1の布陣でスタート。神村学園は立ち上がりから丁寧にボールを繋ぎ、タッチライン際の高い位置に張っているMF⑨若水が右サイドを突破し、連続でクロスをあげる。しかし正智深谷はCB④小屋・⑤森下を中心に最後のところで体を寄せて決定機を作らせない。神村学園はポゼッション時に両SB⑤前原・⑦抜水がアンカー⑩畠中の両脇に位置を上げて、中央で数的優位をつくりつつ、両SHが高い位置をとることで相手を押し込んで優勢に試合を進める（下図参照）。



正智深谷は変則的なポジションをとってくる神村学園の、攻撃時にできるスペースをうまく活用してカウンターに活路を見出す。前掛かりの位置取りにも関わらず神村学園のリスク管理が疎かになっていたこともあり、正智深谷は幾度も良いかたちでフィニッシュまで持ち込むことができた。しかし、シュートの精度を欠き枠へ飛ばすことができない。すると26分、正智深谷の攻撃をカットした神村学園が逆に速攻を仕掛ける。自陣深くから流れるようにパスを繋いで、最後は左サイドを駆け上がったMF⑩篠原

が中央FW⑬福田からのパスを受けて鋭いシュートを突き刺し先制に成功する。

後半に入ると神村学園は1-4-2-3-1へシステムを変更し、ビルドアップ時に両SBが中央へ寄る前半の位置取りから、両SBがワイドにポジションをとって2ボランチと6人でピッチ幅を使って組み立てるシステムに変更する。両SBがタッチライン際にいる時間が長くなったことで前半に不安定だった守備ラインが安定する。この狙いが功を奏し、前半繰り返されていた正智深谷のカウンターが鳴りを潜め、神村学園が41分と42分に追加点をあげることに成功して試合を決定づけた。

正智深谷は県予選の試合をいずれも堅守でリズムを掴み、チャンスを逃さずに得点をするることによって全試合1-0で勝ち上がったが、この試合ではカウンターからのシュートが決まらずに先制点を与えたことで最後までリズムに乗ることが出来なかった。正智深谷にとっては悔しい敗戦となったが、世代別代表にも名を連ねる神村学園MF⑬大迫・FW⑭福田らの全国屈指の攻撃力を肌で感じた経験を、これから迎える選手権で活かしてもらいたい。

2 大会全般

全ての試合を視察することはできなかったが、大会期間中に行動を共にした高体連技術部員やJFAのTSGメンバーによるディスカッションや公式記録などから浮かび上がってきた今大会の特徴やトピックスについて考察したい。

(1) 試合展開

夏季の試合ではすでに定着している、飲水やクーリングブレイクが今大会でも積極的に取り入れられたことや、今大会を通じて雨天が続いて冷涼な気候だったこともあり、例年以上に試合終盤までプレー強度の落ちないチームが多かった。いっぽうで、水分を多く含んだピッチでのビルドアップを躊躇したためか、全国大会レベルにおいても判断を伴わないロングボールを多用するチームが多かった。3回戦以降は相手の状況をよく見て後方からも組み立てる場面が増加したことから考えると、繋ぐ力はあるものの、初戦の硬さがとれるまではリスク回避の思考が強く働いたと考えるのが妥当であろう。

(2) アクチャル・プレーイングタイム

Jリーグでは2012年より魅力的で質の高い試合を目指す上での1つの指標として、「アクチャル・プレーイングタイム（以下APTと表記）」を計測公表している。これはスローインやゴールキック、コーナーキックで試合が再開されたり、ファウルの判定からFKが蹴られるまでの時間を除いた「実際にプレーが動いている時間」のことで、J1では50分台が多く、J2では1/3ほどのチームが40分台となっている（2017シーズンのデータ）。ちなみに欧州主要リーグは60分を超えているところが多く、日本でも60分というのが1つの目標となっている。つまり試合時間の2/3である。

今大会においてある試合を計測したところ前半35分間のうちAPTが15分を切った試合があった。1試合を通してAPTは30分未満という計算になる。試合時間の1/2を下回っている。他の試合でも無駄ともいえる時間の浪費が多々見受けられた。APTが必ずしも勝敗に直結する要素ではないかもしれないが、育成年代での試合であることや、ここからプロに進む者、日本代表となる者が出ていくことを考えるならば少しでもプレー時間を長くしようとする視点を持っていることが大切なのではないだろうか。

(3) 登録メンバー

今大会では帝京高校（東京都第2代表）と流通経済大柏高校（千葉県）のGK登録が1名であった。つまりGKが負傷した場合、フィールドプレイヤーがGKとして出場することとなるが、リーグ戦や選手権大会ではほぼ見られない現象である。これは大会規定により登録が17名と少ないなかで連戦（最も厳しい条件では8日間で5試合）を戦うことを想定しなければならず、消耗度の高いフィールドプレイヤーを1名でも多く登録しておきたいという意図からそのように構成したようである。諸々の事情によるものであるが、セカンドGKの成長にも繋がることであるので、大会規定等今後検討をしていくことで選手の環境を整えていくことが大切なのではないだろうか。

(4) 勝ち上がり

今大会は我が県代表となった正智深谷高校を含め、関東勢10校がすべて2回戦までに敗退という珍しい結果となった。同時期に開催された全国高等学校野球選手権大会でも山梨県代表を除き、関東勢は2回戦までに全て姿を消している。もちろんトーナメントの組み合わせによる偶然の可能性もあるが、緊急事態宣言やまん延防止等重点措置など、新型コロナウイルスをめぐる部活動の規制などが影響している可能性も否めない。こういった結果を振り返ってみても、全国一律で少しでも早く生徒たちが規制のない中で活動ができる日が待ち遠しくなる。

3 結びに

すでに埼玉県や近隣都県でも第100回の記念大会である選手権地区予選が始まっている。依然として活動に最大限の注意を払いながらではあるが、素晴らしい大会となること、そして本県代表のチームが躍進してくれることを期待したい。